

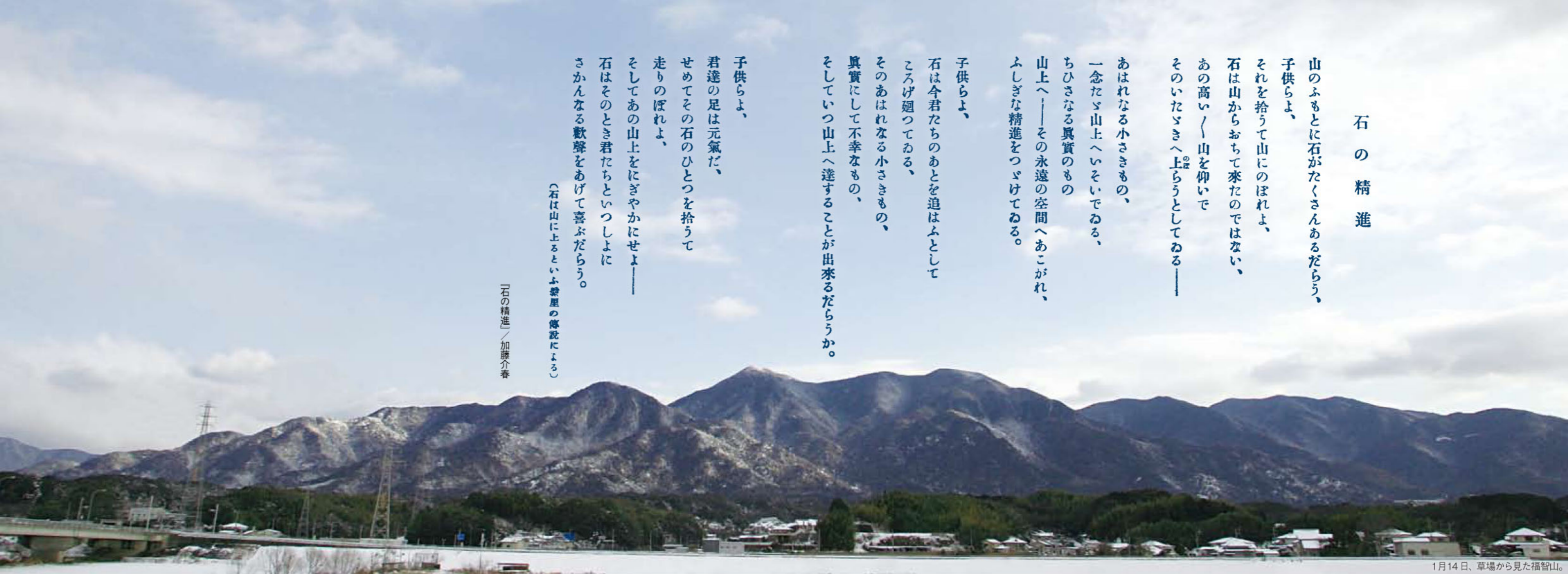
石の精進

山のふもとに石がたくさんあるだらう、
子供らよ、
それを拾うて山にのぼれよ、
石は山からおちて来たのではない、
あの高い山を仰いで
そのいたゞきへ上らうとしてゐる――
あはれなる小さきもの、
一念たゞ山上へいそいでゐる、
ちひさなる眞實のもの
山上へ――その永遠の空間へあこがれ、
ふしぎな精進をつゞけてゐる。
子供らよ、
石は今君たちのあとを追はふとして
ころげ廻つてゐる、
そのあはれなる小さきもの、
眞實にして不幸なもの、
そしていつ山上へ達することが出来るだらうか。

子供らよ、
君達の足は元氣だ、
せめてその石のひとつを拾うて
走りのぼれよ、
そしてあの山上をにぎやかにせよ――
石はそのとき君たちといつしよに
さかんなる歡聲をあげて喜ぶだらう。

〔石は山に上るといふ磐星の傳説による〕

「石の精進」／加藤介春



1月14日、草場から見た福智山。

介春が今、わたしたちに 伝えるメッセージ

介春は昭和20年8月から、腸閉塞でその62年の生涯を閉じる昭和21年12月までの1年あまりを、福智町で過ごしました。介春の晩年を見送った加藤保子さんは、当時を振り返ってこう語ります。

「寿太郎さん（介春）は朝から書齋に
いることが多かったのですが、ある時、
書齋前の廊下で、福智山のほうを向
いて1時間ほど立っていたことがあつ
たんです。わたしが何をしてるんで
すか？と問うても何も言わず、ただ
黙つてじつと山を見つめていました。
高台にある加藤さん宅からは、福
智山の稜線を真正面に眺めることが
できます。介春は何を思い、何を感
じていたのか？ 今ではそれを知る
よしもありません。

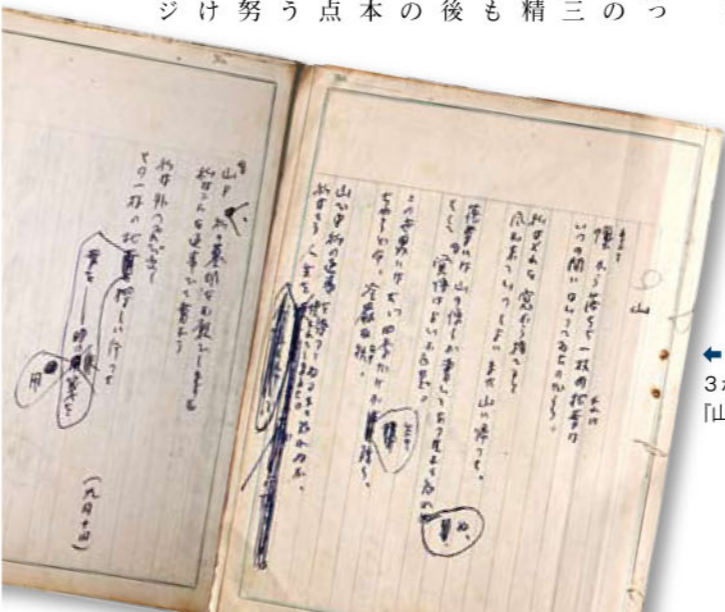
介春の詩には「山」や「石」をうたつたものが多く見られます。その中のひとつ、大正14年に発表され、第三詩集『眼と眼』に所収された『石の精進』。昭和52年の国語の教科書でも取り上げられました。この詩の最後に添えられた「郷里の伝説による」の一文を探り、福智町を訪れた西日本新聞の川上弘文記者は「介春の原点は故郷と子ども。石は山へ登ろうといつも努力している。人間も常に努力が必要で、そのことを忘れちゃいけないという子どもたちへのメッセージを感じた」と見解を述べました。

また、加藤高弘さんはこの詩に「介春自身の生き方」が表れているようにだと語っています。

「『石の精進』からは、自分の信じることを精一杯やる」という祖父の強い意志を感じました。自ら目的を持ち、そのことに向かつて頑張つてほしいと、我々に言っているようです。」

介春自筆の原稿を見ると、その校正の多さに驚きます。しかもこれは発表前の詩に限ったものではなく、雑誌や詩集に掲載された後の詩さえも、詩集に直接書き込むなどして、その時自分が最も良いと納得できることばにひたすら書き換えているのです。介春の詩に対するこだわりと、ひたむきな情熱が伝わってきます。

「祖父は常に前へ、自分の信じる道をただただまっすぐ、正直に生きた人なのだと思います。人に認めてもらうためや名譽のためではなく、信念を貫き通し、自分が納得のいく生き方をしたのではないのでしょうか」という高弘さん。今回、介春の発するメッセージに改めて気づき、自らの生き方を振り返ったのだといえます。成功は何もせずに待っていても近づいてはきません。また、苦勞しても必ずしもすぐに結果は出ないかもしれないかもしれません。しかし目標を持ち、そこに自ら近づこうと努力を続けることで、いつか必ず光が差す――そういった大切なことを、加藤介春は教えてくれたような気がします。



➡昭和21年に編まれた未刊詩稿と俳句集。介春の俳句集はこの一冊のみで、俳句では家族のことが多く歌われている。

➡介春が昭和21年9月10日、死の3か月前に草場の実家で作詩した『山』。右のノートに収められている。



↑介春が晩年よく眺めていたという実家からの風景。時代が巡っても、山は変わらずわたしたちのことを見守っています。

Literary person of Fukuchi town

特集・詩人『加藤介春』／おわり

【資料提供（福岡市総合図書館所蔵）】
P.6『獄中哀歌』『恋の大学生』／P.9『獄中哀歌』『稍を仰ぎて』『眼と眼』『現代詩人全集第七巻』『黎明の歌』／P.10『石の精進』『（無名）』『（俳句集）』『山』

【参考文献】
近代文学研究叢書第59巻／加藤介春全詩集／福岡市文学館 黎明の歌